

プロの翻訳家に挑む

『ハリー・ポッター』と学生たちの感性

沢 辺 裕 子

はじめに

翻訳に完璧なものはありません。ある言語から文化背景の異なる別の言語にテキストを置き換えるのであるから、それは受け入れなければならない事実だ。内容は正確に伝えられても、それを支える言葉の一つ一つにまといつく文化的なイメージもまた、そこには混入する。しかし、翻訳がなければ外国の文学作品や映画が広く普及することは難しい。完璧ではないとしても翻訳が目指すべきなのは、訳語から想起されるイメージができるだけニュートラルな言葉を選び、可能な限りオリジナルの文章や台詞が持つ雰囲気近づけることだろう。

J・K・ローリング (J. K. Rowling, 1965-) の『ハリー・ポッター』シリーズ全七巻は、1997年から2007年に渡って空前のベストセラーとなり、映画も2001年から2011年まで常に観客動員数を誇るヒット作であり続けた。日本では静山社という小さな出版社が1999年から2008年までに松岡佑子による翻訳を出版した。さらにその絶大な人気を受け、2003年から2010年までは〈携帯版〉と称されるソフトカバーの出版が続く。2011年夏に最後の映画が公開され、ハリー・ポッター人気が一段落した感もあったが、2012年秋から2013年春にかけて今度は〈ハリー・ポッター文庫〉が刊行された。映画も2012年冬には作品8本分のDVD

に写真集などがついた豪華なセットが発売され、まだまだ人気は健在のようだし。

日本語訳は読んだことがないが、以前に英文講読の授業で第二巻『ハリー・ポッターと秘密の部屋』を読んでいる時に、学生がおかしな訳をしたので訂正したところ、「翻訳がそうになっている」と反論され、調べてみた。魔法使いの子どもたちが学ぶhogwarts魔法魔術学校にはハグリッドという大男の森の番人がおり、彼が若い頃にペットとして飼っていた巨大蜘蛛を、当時まだ在學生だったトム・リドル（後の闇の魔法使いヴォルデモート）が殺そうとする場面だ。

A vast, (a)low-slung, hairy body and a tangle of black legs; a gleam of many eyes and a pair of razor-sharp pincers—Riddle raised his wand again, but he was too late. The thing bowled him over as (b)it scuttled away, tearing up the corridor and out of sight. Riddle scrambled to his feet, looking after it; he raised his wand, but the huge boy leapt on him, seized his wand and threw him back down, yelling, (c)‘NOOOOOOO!’

(*Harry Potter and the Chamber of Secrets*,
Chap. 13 ‘The Very Secret Diary’)

毛むくじゃらの巨大な胴体が、(a)低い位置に吊り下げられている。絡み合った黒い脚、キラキラ光るたくさんの眼、剃刀のような鋭い鋏――。

リドルがもう一度杖を振り上げたが、遅かった。その生き物はリドルを突き転がし、(b)ガサゴソと大急ぎで廊下を逃げて行き、姿を消した。リドルは素早く起き上がり、後ろ姿を目で追い、杖を振り上げた。

(c)「やめろおおおおお!」 どでかい少年がリドルに飛びかか

り、杖を引ったくり、リドルをまた投げ飛ばした。

(『ハリー・ポッターと秘密の部屋』第13章「重大秘密の日記」)

原文(a)の low-slung という表現は「低い、地面に近い」という意味であり、ここでは地面に這いつくばうような蜘蛛の体つきを表している。body を修飾する vast, low-slung, hairy はすべて形容詞であり、その一つを述部のように訳すのはよくあることだとしても、low-slung を「低い位置に吊り下げられている」と取るのは完全に誤訳である。単行本ではこう誤訳されていても、その後出版された携帯版や文庫版では訂正されているはずだと期待して調べてみたが、訳は間違っただけだった。

このパッセージには誤訳だけではなく、翻訳上の興味深い点もいくつか含まれている。英語には同じような動作を表す数多くの動詞があるが、日本語は動詞の数が圧倒的に少なく、副詞や擬音語、擬態語を付け加えることで、英語の動詞が表す様態を描写する傾向がある。(b)の原文と翻訳を比較してみると、scuttle away という動詞表現を「ガサゴソと……逃げて行き」と擬態語を使って訳しているのがわかる。また(c)のように英語では大文字になっているだけの箇所も、松岡の翻訳ではフォントをゴシック体に変えてより目立つようにしている。フォントの種類を変えるのはこの部分だけではなく、例えば手紙文、呪文の言葉、「蛇語」、闇の魔法使いヴォルデモートの台詞などを違ったフォントを使って記載している。日本語版ほどではないが、フォントを数種類使っているアメリカ版の影響だろう²⁾。

松岡の翻訳では、人称の訳し方もどうかと思うものがある。これも学生に聞いて愕然としたことだが、闇の魔法使いヴォルデモートが言う I を「俺様」と訳したり、ハリーを目の敵にするスネイプ教授が言う I を「我輩」と訳したりするのは訳し過ぎだ。もちろん英語の一人称 I は日本語では性別や年齢、そして社会的地位によって訳し分けなければならない

い厄介な人称代名詞ではあるが、それにしても「俺様」や「我輩」は、漫画のガキ大将や明治時代の猫でもあるまいし、滑稽の域に達している。しかもスネイプの一人称にはバリエーションがあり、話す相手によって「私」「私め」「僕」と変化する。これは日本語の文脈の中ではそれほど奇異なことでもないのかもしれないが、最初に訳し過ぎて後でイメージが合わなくなってしまうからだとも考えられる。

戸田奈津子の映画の字幕もまた、違和感を感じる部分が多いのは否めない。例えば、第一作『ハリー・ポッターと賢者の石』で、ハリーがクリスマス朝に届いた包みを開けてみると、不思議なマントが出て来る場面の字幕がその一例だ。

RON I know what that is. That's an invisibility cloak!

HARRY I'm invisible?

RON They're really rare. I wonder who gave it to you.

ロン 知ってるぞ！ それは透明マントだ

ハリー 僕は透明？

ロン レア物だぜ だれから？

‘They're really rare.’ というごく普通の言い方を「レア物だぜ」という、一昔前に流行ったような安っぽい表現で訳してしまっている。音として聞く英語の台詞と同じだけの情報を、文字として読む字幕に詰め込むことは無理で、字幕の方が圧倒的に情報量は少なくなってしまうが、だからと言って手あかにまみれた流行り言葉を安易に使うのは、何年か経った時に意味さえ通じなくなってしまう危険を冒すことにもなる³⁾。情報量が少ないと言えば、最後の ‘I wonder who gave it to you.’ も本当は「誰がそれをくれたんだろう」というロンの独り言に近い発言なのだが、字幕では「だれから？」とハリーに対する直接的な質問

になっている。

冒頭からプロの翻訳家たちの批判になってしまったが、誤訳やセンスの感じられない訳が多いとしても、翻訳や字幕があるからこそ『ハリー・ポッター』の本と映画は日本でもこれだけの人気が続くことになった。プロの翻訳家たちも完璧ではないという現実を知り、自分たちにも手が届くことなのだともモチベーションを与えた上で、今年度後期の英文学科専門ゼミナールでは学生たちに『ハリー・ポッター』翻訳に挑戦してもらった。

原書7冊の合計3400ページ余りもあるテキストを全15週のゼミで読むわけにもいかないなので、映画を観て物語の流れを把握しながら翻訳作業を進めた。そしてプロットとして大切な場面（特に映画では描かれていない場面）や、まさに英語らしい表現をどう訳すかが試されるような場面などを原文から選んで読み、学生たちは指定された部分の翻訳に取り組んだ。そして各自の翻訳ができあがってから、プロの翻訳と比べてみた。逆に、映画の場合は観る時点ですでにプロの字幕を読んでいるので、英語の台詞と字幕を並べたハンドアウトを参考に、その情報量の差を意識しながら、字幕を作った。ゼミでは字幕の一般的な字数制限2行20字にあまり捕われることなく、自由に自分なりの字幕を書く方針をとった。

第1巻から第7巻まで、本からの引用と映画の台詞を学生たちがどのように翻訳したかを以下で紹介したい。ゼミではここで紹介するよりもかなり多くのテキストを翻訳したが、ここでは場面としてあるいは言語的に面白いものをピックアップした。

1. 『ハリー・ポッターと賢者の石』

Harry Potter and the Philosopher's Stone (1997)

《BOOK》

親戚のダーズリー家で虐げられながら 10 年間を過ごしてきた主人公ハリー・ポッターが、11 歳の誕生日を迎えると同時に、使者として訪れた大男ハグリッドから魔法使いであることを告げられ、9 月 1 日午前 11 時キングズ・クロス駅 9 と 3/4 番線発のホグワーツ特急に乗ってホグワーツ魔法魔術学校に向かう。汽車の中でハリーはロン・ウィーズリーと知り合い、今まで存在すら知らなかった魔法使いの世界について色々教えてもらう。汽車の旅も後半になって、ハリーとロンのいるコンパートメントにやって来たドラコ・マルフォイが、子だくさんで家計の苦しいウィーズリー家の五男ロンと一緒にいるハリーに、まことしやかにアドバイスをする場面だ。

‘You’ll soon find out some wizarding families are much better than others, Potter. You don’t want to go making friends with the wrong sort. I can help you there.’

He held out his hand to shake Harry’s, but Harry didn’t take it.

‘I think I can tell who the wrong sort are for myself, thanks,’ he said coolly.

(Chap. 6 ‘The Journey from Platform Nine and Three-Quarters’)

「ポッター君。そのうち家柄のいい魔法族とそうでないのがわかってくるよ。間違っただけとはつき合わないことだね。そのへんは僕が教えてあげよう」

男の子はハリーに手を差し出して握手を求めたが、ハリーは応じなかった。

「間違ったのかどうか見分けるのは自分でもできると思うよ。どうもご親切さま」ハリーは冷たく言った。

(第6章「9と3/4番線からの旅」松岡佑子訳)

この場面は、本の中でも映画でもハリーがとても「カッコいい」場面である。短時間のうちにロンと親しい友だち同士になったハリーが、気取った様子のマルフォイにロンをけなされて、逆にマルフォイに大恥をかかせる場面だ（映画ではこの場面は Hogwarts に着いてからの設定）。松岡佑子が「どうもご親切さま」と訳してしまっている ‘thanks’ を学生たちがどう訳すか。松岡訳はどう考えても 11 歳の男の子が言うような台詞ではない。いくらこれが皮肉表現だとしてもだ。ハリーに年齢が近い学生たちの訳をぜひ見てみたかった⁴⁾。

KA：彼はハリーに手をさしのべた。が、ハリーは無反応だった。それどころか、「自分にふさわしい友人くらい、自分で見つけられるよ。ご親切にありがとう」と言い放った。

MK：彼はハリーと握手するために手を差し出したが、ハリーはそれのことわった。

「ぼくは自分で友達を見極めることができるよ、ご忠告ありがとう」と彼は冷たく言った。

KK：彼は手を差し出したが、ハリーは握手しようとはしなかった。「僕にとって誰が良いか悪いかは自分でわかるよ」と冷たく言い返した。

SK：ドラコはハリーに握手を求めたがハリーは断った。

「自分の友達是自己で見つけるよ」とハリーは冷静に言った。

YS：マルフォイはハリーに握手を求め、手をさしのべた。しかしハリーはマルフォイの手をとらなかった。ハリーは「ありがとう。でも

僕はどれが間違った一族であるかを自分で判断できるよ」と冷静に言いはなった。

YT：彼はハリーと握手をしようと手をさしのべた。しかしハリーはその手をとらなかった。

「誰が悪い種族かは自分でわかります。ありがとう」と冷たく言った。

RT：ドラコは握手をするために手を差し出したが、ハリーは手をとらなかった。

「誰が悪いかは自分でわかる」とハリーは冷たく言った。

YH：マルフォイはハリーに握手を求めた。しかしハリーはそれを断った。

そして「僕は自分で選べる」と冷たく言った。

一人は原文では文末にある‘thanks’の訳を文頭に持って来た。二人が文脈の流れを意識して「ありがとう」に「ご親切に」や「ご忠告」と訳を追加した一方で、半数の四人が‘thanks’そのものを訳していないのも面白いと思った。英語では句読点と同じくらい気軽に挿入される感謝の言葉は、日本語の文脈の中ではあまり馴染まない時もあるのかもしれない。

《MOVIE》

話は前後するが、映画からはハリーが7月31日の真夜中に独りぼっちで誕生日を迎える場面を選んだ。hogwartsへの入学を許可する手紙が魔法界からハリー宛に届き始め、それをハリーに知らせたくない親戚ダーズリーはハリーを連れて各地を転々としていた。海上の小島にある小屋に泊まる夜にハリーは11歳の誕生日を迎える。ベッドどころかソファにすら寝させてもらえないハリーが、汚れた床の上にバースデイ・

ケーキの絵を描き、キャンドルの火を吹き消す前に言う台詞だ。

HARRY Make a wish, Harry.

ハリー おめでとう ハリー (字幕：戸田奈津子)

‘Make a wish’とは、誕生日を迎えた人がバースデー・ケーキのキャンドルを吹き消す前に、「願いごとをして」と周りの人たちが言ってあげるとの言葉だ。それを誰にも誕生日を祝ってもらえないハリーが自分自身に言っている。戸田奈津子の字幕では、キャンドルを吹き消す行為とは無関係の「おめでとう」で済ませてしまっている。どちらも本当は周りの人たちが言うべき祝福の言葉を本人が言っている寂しさという点では同じだが、戸田訳はケーキと無関係な台詞になっているのが残念なところだ。年の数だけケーキに立てたキャンドルを一息で吹き消すことができれば、その願いごとが叶うという文化的なものが何も伝わってこないからだ。

KA： さあ、願おう、ハリー

MK： 願いごとをしよう、ハリー

KK： お誕生日おめでとう、かわいそうなハリー

SK： 幸せになれよ、ハリー

YS： 僕の願い事が叶いますように

YT： よい一年を、ハリー

RT： ハリー、さみしいけど、おめでとう

YH： さみしい誕生日おめでとう、ハリー

ハリーの心理の説明が過ぎたせいかな、願いごとを掛けるという点よりも、自分自身で誕生日を祝わなければならないハリーの寂しさの方に学

生たちの視線が向いてしまい、願いごとについての表現があるのは5つに留まったが、それでも「かわいそうな」や「さみしい」という表現を入れて訳に寂しさをなんとか出そうとする努力は、プロよりも優れているとも思えた。この場面のポイントであった文化的なことを翻訳することと合わせて、言葉の裏にある主人公の心情を読み取る練習にもなった。

2. 『ハリー・ポッターと秘密の部屋』

Harry Potter and the Chamber of Secrets (1998)

《BOOK》

第2巻の大詰めで、ハリーは日記に閉じ込められた闇の魔法使いヴォルデモートの「記憶」である若きトム・リドルと対決する。その闘いを制したハリーが、自分とヴォルデモートとの間に存在するいくつかの共通点について悩み、ついにhogwarts校長ダンブルドアにその理由を聞く。

第1巻でハリーがhogwartsに入学した際、「組分け帽子」がハリーを4つの寮のうちの一つグリフィンボール寮に入れるのだが、ハリーは帽子が自分をスリザリン寮に入れてもいいと言ったことをよく憶えている。スリザリン寮はヴォルデモートが所属していた寮で、歴史的にも悪い魔法使いが卒業することで有名な寮だ。しかも蛇語を話せることを含めて、ハリーにはヴォルデモートが誇った資質のいくつかが備わっている。それはヴォルデモートが1歳の幼子であったハリーを殺そうとした時に、逆に自分の力を失ってしまうと同時に、その力の一部をハリーに移してしまったからだとダンブルドアが説明するのがこの場面だ。

‘Voldemort put a bit of himself in *me*?’ Harry said, thunder-struck.

‘It certainly seems so.’

‘So I *should* be in Slytherin,’ Harry said, looking desperately into Dumbledore’s face. ‘The Sorting Hat could see Slytherin’s power in me, and it—’

‘Put you in Gryffindor,’ said Dumbledore calmly. ‘Listen to me, Harry. You happen to have many qualities Salazar Slytherin prized in his hand-picked students. His own very rare gift, Parseltongue . . . resourcefulness . . . determination . . . a certain disregard for rules,’ he added, his moustache quivering again. ‘Yet the Sorting Hat placed you in Gryffindor. You know why that was. Think.’

‘It only put me in Gryffindor,’ said Harry in a defeated voice, ‘because I asked not to go in Slytherin . . .’

‘*Exactly,*’ said Dumbledore, beaming once more. ‘Which makes you very *different* from Tom Riddle. It is our choices, Harry, that show what we truly are, far more than our abilities.’

(Chap. 18 ‘Dobby’s Reward’)

「ヴォルデモートの一部が僕に？」ハリーは雷に打たれたような気がした。

「どうもそのようじゃ」

「それじゃ、僕はスリザリンに入るべきなんだ」ハリーは絶望的な目でダンブルドアの顔を見つめた。

「『組分け帽子』が僕の中にあるスリザリンの力を見抜いて、それで——」

「君をグリフィンドールに入れたのじゃ」ダンブルドアは静かに言った。

「ハリー、よくお聞き。サラザール・スリザリンが自ら選び抜いた生徒は、スリザリンが誇りに思っていたさまざまな資質を備えてい

た。君もたまたまそういう資質を持っておる。スリザリン自身のまれにみる能力である蛇語……機知に富む才知……断固たる決意……やや規則を無視する傾向」

ダンプルドアはまた口髭をいたずらっぽく震わせた。

「それでも『組分け帽子』は君をグリフィンドールに入れた。君はその理由を知っておる。考えてごらん」

「帽子が僕をグリフィンドールに入れたのは」ハリーは打ちのめされたような声で言った。

「僕がスリザリンに入れなくて頼んだからに過ぎないんだ……」

「その通り」ダンプルドアがまたニッコリした。

「それだからこそ、君がトム・リドルと違う者だという証拠になるんじゃ。ハリー、自分がほんとうに何者かを示すのは、持っている能力ではなく、自分がどのような選択をするかということなんじゃよ」(第18章「ドビーのごほうび」松岡佑子訳)

「選択」は『ハリー・ポッター』シリーズを通しての大きなテーマの一つなので、それに関わる箇所を翻訳に選んだ。文法的にも It~that…構文の中に複合関係詞 what が入ったけっこう複雑な文だ。それと同時に、英語では文の途中に呼びかけを挿入するという、日本語でどう処理したらよいか迷う要素も含まれていた。

KA：「自分が本当に何なのかは、能力なんかより、自分の選択が示しているのだよ、ハリー。」

MK：「ハリー、私たちが本当に何者なのかを示しているのは、能力よりも我々の選択だ。」

KK：「我々が本当に何であるかをあらわすのは、能力よりも我々の選択

なのじゃよ、ハリー。」

SK：「私たちが本当に何者かを表すことは、我々の選択なんだ」

YS：「その決断が我々の偽りのない姿であり、またその決断を下す才能が、トム・リドルから我々を遠ざけているのだ。」

YT：「それは私たちの選択だ、ハリー。私たちの才能よりもはるかに私たちの真実を見せるのは。」

RT：「私たちの選択は、ハリー、私たちは実に何かを、私たちの才能より見せるのだ。」(RT)

YH：「私たちが何者であることを示すのは、持って生まれたすばらしい才能より、私たち自身の選択なのだ。」

文の構造が複雑なので、この箇所は学生たちにとってかなり翻訳しづらかったようだ。訳語が抜けてしまったり、翻訳というよりも意味を一度消化してから別なものに作り変える翻案になった訳もある。far more than の far「はるかに」があまり出て来ないのが残念だったが、よく見るとそれは松岡訳にも生かされていない。「人間の本質は、能力よりも選択に表れるものだ」という大意はみな把握したようだった。

our という簡単な代名詞でさえ、「私たちの」と「我々の」に分かれてしまうのが日本語の特徴だろう。ここは老人のダンブルドア校長だから「我々の」が出てくるのであって、もしこの台詞をハリーが言ったのであれば「僕たちの」になったはずだ。日本語の人称代名詞はそれを誰が言っているかを常に意識して訳さなければならないが、そのことも学生たちがいつの間にか意識できるようになっていた。松岡訳ではダンブルドア校長の語尾は老人らしく「～じゃ」となっていて、翻訳を読み始めたらしい学生からはその影響がうかがえる。

呼びかけの「ハリー」は、文頭が一人、文末が二人、文の途中が二人、削除が三人だった。日本語の会話の途中で人の名前を呼ぶのは、相手の

注意を喚起する時以外は珍しいことなのだろう。英語では you という二人称代名詞が入る主語の部分に、日本語ではダイレクトに相手の名前を入れる場合が多く、それは呼びかけではない。だから日本語の会話の中で、相手の名前を呼びかけとして挿入することは、英語ほど自然には行えないことなのかもしれない。

原文で強調のためにイタリック体になっている箇所を松岡訳は太字で処理しているということもこのパッセージを読んでわかった。なるほど日本語にはイタリック体よりも太字の方が自然だ。

《MOVIE》

あらぬ嫌疑を掛けられて魔法界の牢獄アズカバンに送られていたハグリッドが、映画の大団円を迎えてその疑いが晴れ、hogwartsに戻って来た場面だ。大広間で祝宴が開かれているところにハグリッドが登場する。ハグリッドがハリー、ロン、ハーマイオニーと一緒に座るテーブルへ行き、三人の活躍がなければ自分は今も牢獄にいたはずだと感謝する。そのハグリッドにハリーが言う台詞だ。

HARRY There's no Hogwarts without you, Hagrid.

ハリー やっぱりハグリッドがいなきゃ (字幕：戸田奈津子)

戸田訳にはhogwartsの名前は言及されていない。場面を観ればhogwartsは明らかな言外の意味として共通理解を得られるだろうということなのだろうか。しかしここはやはりhogwartsの名前も字幕に出した方が、ハリーにとって大切な二つの存在は切っても切り離せない関係なのだ⁵⁾と強調できるだろう。さらに「ハグリッドがいなきゃ」だけでは、ハグリッドを必要としているのが自分たち三人だけという意味にも取れる。そうではなく、hogwartsという学校全体がハグリッドを必要とし

ているのだとハリーが言うことに意味がある。というのも、ハグリッドはホグワーツに在学中、飼っていた巨大蜘蛛が一人の女子生徒を殺したと疑われて退学になっているのだ。ダンブルドア校長の恩情で森の番人としてホグワーツに留まるが、魔法を使うことすら許されていないハグリッドには強い劣等感がある。これは伏せられていたハグリッドの過去を知ってしまったハリーが掛ける言葉なのだ。学生たちには必ず「ホグワーツ」も字幕に入れるようにと指示した。

KA： ハグリッドがいなきゃホグワーツは成り立たないよ

MK： ハグリッドがいなければホグワーツは成り立たないよ

KK： ハグリッドがいらないホグワーツなんて考えられないよ

SK： ハグリッドのホグワーツ

YS： ハグリッドがいなきゃ、ホグワーツじゃないよ

YT： ハグリッドのいないホグワーツはホグワーツじゃない

RT： ホグワーツにはハグリッドがいないとね

YH： ハグリッドがいらないホグワーツなんてありえないよ

英語としては単純な短い台詞なので、字幕にもそれほどバリエーションが出るわけではないが、「成り立たない」「考えられない」「ありえない」などの比較的強い表現が出て来たのは、やはりハグリッドの過去まで考慮した上で、脚本家の意図を汲んだ学生たちが字幕の言葉を選ぶようになった証だろう。「ハグリッド」を呼びかけとしてではなく、youの代わりに使って訳した学生が多いのも、前のセクションで見た日本語の特徴に当てはまる。

3. 『ハリー・ポッターとアズカバンの囚人』

Harry Potter and the Prisoner of Azkaban (1999)

《BOOK》

第3巻のこの時点まで、ハリーは自分の両親の死はシリウス・ブラックのせいであると信じている。両親の信頼を裏切り、ヴォルデモートに二人の居場所をおしえて殺害を許したのは、ハリーの父ジェイムズの親友でありハリーの名付け親であるこの人物で、魔法界の牢獄アズカバンを脱獄し、今やハリーの命を狙っていると考えられていた。しかしながら、ピーター・ペティグリューこそが真犯人であるとの章でわかる。この人物は学生時代にジェイムズと仲の良かった四人の仲間の一人で、12年間死んだものと思われていた。

ブラックと仲間のもう一人「闇の魔法に対する防衛術」を教えるリーマス・ルーピン教授が、ペティグリューを処刑しようとするが、両親を殺されているハリー自身がそれを留める。それを感謝してハリーにすがるつくペティグリューをハリーが振り払う場面だ。

‘Get off me,’ Harry spat, throwing Pettigrew’s hands off him in disgust. ‘I’m not doing this for you. I’m doing it because I don’t reckon my dad would’ve wanted his best friends to become killers—just for you.’

(Chap. 19 ‘The Servant of Lord Voldemort’)

「放せ」

ハリーは汚らわしいとばかりにペティグリューの手をはねつけ、吐き棄てるように言った。

「おまえのために止めたんじゃない。僕の父さんは、親友が——おまえみたいなもののために——殺人者になるのを望まないと思っただけだ」(第19章「ヴォルデモート卿の召使い」松岡佑子訳)

この場面を選んだのは、英語的な面白さというよりも、最終巻での展開に繋がる伏線となっているからだ。ここでペティグリューの命を助けたことが、最終巻でハリーたちを危機的状況から救うことになる。残念ながら最後の映画ではその場面は描かれなかったので、ここでハリーがした高潔な行為も宙に浮いたままになってしまったが、小説の中ではうまく結びついている。

KA：「これはあなたのためにしてるんじゃない。父は親友が、殺人者になることは望んでいない。特にあなたのためだけには。」

MK：「僕はあなたのためにこのようなことをしていない。僕のお父さんが、ただ君のために、親友に殺人者になってもらいたかったとは思ってないから僕はこうしているんだ。」

KK：「僕はお前を殺しやしない。だけど、二人がお前を殺そうとするのは止めなければならない。だって僕のお父さんが親友に人殺しをするような人間になってほしいなんて思うわけない。お前なんかのためにね。」

SK：「あなたのために止めたわけじゃない。父の友達を殺人者にしただけじゃなかっただけだ。」

YS：「別に君のためじゃない。僕のお父さんは殺す価値のない人間を殺してまで親友に人殺しになってほしいなんて思っていなかっただろう。」

YT：「お前のためじゃない。私は父の親友がお前のような殺人犯になることを望んだとは思わないからだ。」

RT：「僕はお前のためにこのようなことをしていない。僕はもしお父さんが生きていたら、親友がお前のためだけに、殺人者になってほしいと思わないだろう。」

YH：「あなたのためにしたわけじゃない。きっとお父さんは親友たちに

殺人者になってほしいだなんて思わないから。」

日本語では文末まで読まないとか肯定なのか否定なのかわからない「～ではないと思う」という表現は、Yes か No かを最初に明確にしないと気の済まない英語では「～だと思わない (I don't reckon/think ~)」と文頭で表現するのが普通だ。日本語とは異質のその概念と苦手な仮定法過去が並んでいるこの文章もまた学生たちにとっては難しかったようで、原文にはない要素がずいぶん入ってしまい翻案化している。ここはプロの翻訳が簡潔でわかりやすい。長くて複雑な箇所を訳させると、やはり小説の翻訳は難しいと実感するようだった。最後の just for you は、訳出さえされていないものも多い中で、「お前なんかのためにね」と英語と同じく独立した要素として文末に置く訳もあった。

両親の殺害に加担したペティグリューに対する二人称 you を何と訳すかにも興味があった。その場で殺してやりたいほどの憎い相手だ。「あなた」「君」「お前」という3種類の二人称に訳されていて、学生一人一人の言葉に対する感覚はやはりばらばらなのだと実感した。my dad も「父」と「お父さん」に分かれている。松岡訳は「父さん」を使っていることにも初めて気がついた。

《MOVIE》

第3巻で初めて登場する魔法の道具に逆転時計がある。その時計を使って優等生ハーマイオニーは同じ時間に開講されている複数の授業に出席していたのだが、物語の終盤にハリーとハーマイオニーがその逆転時計で過去に戻り、ハグリッドの飼っているヒッポグリフとシリウス・ブラックを救おうとする。3時間前の過去の自分たちの行動をもどかしく見ながら、なんとかしなければいけないと状況は切迫している時に、ハーマイオニーが自分の後ろ姿を見てこう言う。

HERMIONE Is that really what my hair looks like from the
back?

ハーマイオニー 私の髪って あんな… (字幕：戸田奈津子)

台詞に比べて字幕の情報というのはこんなにも断片的なのだとあらためて実感できる場面だ。ハーマイオニーが言っているのは「私の髪って後ろからはあんな風に見えるの？」ということだが、字幕では意味はそこまで伝わらない。普段目にする事のない自分の後ろ姿を見てショックを受けているハーマイオニーの気持ちも、半分くらいしか伝わらないだろう。

KA： 私の髪って、うしろから見たら、あんなもんなの？

MK： 後ろから見ると私の髪ってあんなように見えてるの？

KK： 私の髪ってあんなふうに見えるんだ。

SK： 私の後ろ髪ってあんななの？

YS： 私の髪って後ろから見たら本当にあんな感じなの？

YT： 私の髪って、うしろはあんな感じ？

RT： 私の髪はあんな風に見えるの？

YH： 後ろから見た私の髪ってこんな感じなの？

学生には字数はあまり気にしないように言っているが、それでも字幕はできるだけ簡潔な方がいい。だからこそ「後ろ髪」という、「後ろ髪を引かれる」という表現の他はあまり使わない言葉も出てくるのかもしれない。この中で簡潔なのは、やはり「後ろから見ると」という要素を抜いてしまった訳だ。ハーマイオニーの台詞に込められた自分の髪に対する驚きや不満を字幕に出すのはなかなか難しいものだと思う。さらに

この場面では、オマケとして「コミック・リリーフ」という概念も学生たちは学んだ。緊迫した状況の中に、短い喜劇的な要素を挿入することで、緊迫した状況をふっと緩める短い場面だ。主に演劇やミュージカルで用いられる技法だが、『ハリー・ポッター』映画でさえそういう要素も含んでいるのだと知ること、今後の映画の見方にも小さな方向性が生まれたのではないかと思う。

4. 『ハリー・ポッターと炎のゴブレット』

Harry Potter and the Goblet of Fire (2000)

《BOOK》

ファンタジーというだけではなく、子どもたちの成長物語としての要素も持った『ハリー・ポッター』シリーズでは、第4巻に入ってハリー、ロン、ハーマイオニーの三人が14～15歳という思春期半ばに入り、深刻な仲違いも描かれるようになる。17歳以上の生徒だけが参加を許される「三大魔法学校対抗試合」に、本人の意志ではないのにハリーも参加することになり、そのことで気分を害したロンがハリーと喧嘩する。長期間に渡って口もきかなかった二人だが、命がけの試合を観戦して、ハリーが自分で申し込むわけがないと悟ったロンがハリーに謝ろうとする場面だ。

Hermione stood nervously between them looking from one to the other. Ron opened his mouth uncertainly. Harry knew Ron was about to apologise and, suddenly, he found he didn't need to hear it. (Chap. 20 'The First Task')

ハーマイオニーが心配そうに二人の間に立って、二人の顔を交互に見ていた。ロンが曖昧に口を開きかけた。ハリーにはロンが謝ろうとしているのがわかった。突然、ハリーは、そんな言葉を聞く必

要がないのだと気づいた。 (第20章「第一の課題」松岡佑子訳)

この場面は、ハリーとロンの友情というシリーズのテーマの一つが描かれているので学生たちに読ませたかったし、それと同時に he found he didn't need to hear it の found や it を学生たちがどう処理するかを見たかった。それほど難しいことではないが、it が指す直接の単語はなく、Harry knew Ron was about to apologise という部分から何を判断するかがポイントだった。

KA：ハリーはロンが謝ろうとしていることがわかった。そして、謝罪の言葉を聞くまでもないということに、急に気付いたのだった。

MK：ハリーはロンが謝ろうとしていたことがわかった。そして急にハリーはロンが謝るべきではないとわかった。

KK：ロンが謝ろうとしたことがわかると、ハリーはそんなこと聞く必要がないと思った。

SK：ハリーはロンがあやまろうとしているのに気づいた。そして突然、ロンがあやまるのを聞く必要がないと思った。

YS：ハリーはロンが謝ろうとしたことに気づいた。それを見たハリーはふと、何も聞く必要はないなと悟った。

YT：ハリーはロンがあやまろうとしていることを知った。すると、ハリーはその言葉を聞く必要がないとわかった。

RT：ハリーはロンがあやまろうとしているのがわかった。急にロンがあやまる言葉は必要ないと思った。

YH：ハリーはロンがあやまろうとしているのがわかった。すぐにハリーはその言葉を聞く必要がないこともわかった。

found は「気づいた」「わかった」「思った」「悟った」などと訳された。

そして it は「謝罪の言葉」という意味の他に、謝るという行為そのものを捉えた訳もあった。「そんなこと聞く必要はない」「何も聞く必要がない」など、英語の it が曖昧であるのと同じように日本語でも曖昧に訳したセンスの光るものまであったのが驚きだった。学生の感性は計り知れない。松岡訳では「そんな言葉」となっている。

もう一つこのパッセージで英語と日本語の差が際立つ部分がある。それは he found he didn't need to hear it で、それに先立つ部分の主語が Harry であるし、意味的にも he がハリーであることは一目瞭然だが、プロも学生たちも誰も訳の中で「彼」という代名詞を使った者はいなかった。主語をハリーと言い直しているか、あるいは全く主語を使わずに済ませているかのどちらかだ。日本語では三人称の代名詞はあまり自然には使われないということをあらためて感じるパッセージだった。

学生たちに訳してもらった部分ではないが、Ron opened his mouth uncertainly を「ロンが曖昧に口を開きかけた」とした松岡訳も、ピントのずれた拙訳ではないだろうか。ここは「何を言っているのかわからない」というような意味で uncertainly が使われているはずで、それを「曖昧に」では口の開き方の様態を指しているように聞こえる。

《MOVIE》

ここも話が前後してしまうが、これはハリーとロンの仲違いが始まる場面だ。ハリーが年齢制限を無視して対抗試合に申し込んだと勝手に思い込んでいるロンに対して、ハリーが何を馬鹿な、と言う。

HARRY You're being stupid.

RON Yeah, that's me.

Ron Weasley, Harry Potter's stupid friend.

ハリー どうかしてる

ロン 悪かったな

どうせ僕は どうかしてるよ (字幕：戸田奈津子)

You're being stupid を戸田のように「どうかしてる」と訳すのもそれはそれで上手だが、実はこの一連の言い合いの中でスパイスが利いているのは、stupid と言われたロンが同じ単語を使い、自分のことを Harry Potter's stupid friend と言い返す部分なのだ。戸田訳の「どうせ僕はどうかしてるよ」も「どうかしてる」というハリーの言葉を繰り返して、趣旨の半分は伝えているのだが、friend に込められたロンの劣等感を伝えるには至っていない。

ハリーに「君は馬鹿な振舞いをしている」という趣旨のことを言われて、「そう、それが僕さ。ハリー・ポッターの馬鹿な友だちロン・ウィーズリーさ」とひねくれた発言をしているのだ。優秀な兄たちが四人もいる上に、hogwarts 入学以来いつもハリーの傍らで、一個人「ロン・ウィーズリー」というよりも「ハリー・ポッターの親友」という肩書きを引き受けてきたロンが言うのは、ハリーの友だちという立場がなければ、自分はただの馬鹿なのだという劣等感と嫉妬心に苛まれた台詞なのだ。

KA：元々僕は君より劣っているよ

MK：ぼくはハリーの友達の中でもばかな友達だよ

KK：僕はハリー・ポッター君のおかしくなった友達だよ

SK：どうせ僕はバカなやつだ

YS：どうせ僕はハリー・ポッターの変な友達だよ

YT：ボクは君のバカな友達だ

RT：僕はハリーのばかな友だちさ

YH：どうせ僕は ばかなやつさ

これは私の明らかな失敗で、下線部だけではなくハリーの台詞から全部を訳させてみないと真価がわからない部分だった。それでも自虐的なロンの台詞の痛々しさは学生たちにも伝わったのではないかと思う。半数が「ハリーの友だち」という意味の言葉を字幕に入れている。

また学生たちは You're stupid と You're being stupid とでは微妙に意味が違ってくこともこのパッセージで学んだ。You're stupid が一般的に恒常的な状態を指すのとは違い、You're being stupid は be 動詞を現在進行形にしているだけに、「いつもは違うけれど今は馬鹿みたいだ」という一時的な状態を指している。だからこれは、喧嘩しながらもハリーがロンを少しだけ思いやっていることがわかる表現でもある。

5. 『ハリー・ポッターと不死鳥の騎士団』

Harry Potter and the Order of the Phoenix (2003)

《BOOK》

ハリーと闇の魔法使いヴォルデモートとの間に精神的な繋がりがあると察知したダンブルドアは、スネイプ教授から「閉心術」を習うようにとハリーに命じる。しかし結局ハリーは心を閉じる術を習得することができなかった。ある夜ハリーは名付け親シリウス・ブラックが魔法省で捕われ拷問を受けている夢をみて、仲間たちとともに魔法省へ向かう。しかしハリーたちを待ち受けていたのはヴォルデモートを指示する死喰い人たちだった。その闘いでハリーを助けにやって来たブラックは殺されてしまう。ヴォルデモートとダンブルドアが対決する中、ヴォルデモートがハリーの体に取り憑こうとして失敗し、逃亡する。

その後、なぜヴォルデモートがハリーに取り憑くことができなかったのかをダンブルドアが説明するのが次の場面だ。ヴォルデモートは愛というものを憎んでいるので、その愛に満ちたハリーの体には乗り移ることができなかったとダンブルドアは言うのだ。

‘... It is the power held within that room that you possess in such quantities and which Voldemort has not at all. That power took you to save Sirius tonight. That power also saved you from possession by Voldemort, because he could not bear to reside in a body so full of the force he detests. In the end, it mattered not that you could not close your mind. It was your heart that saved you.’ (Chap. 37 ‘The Lost Prophecy’)

「その部屋の中に収められている力こそ、きみが大量に所持しており、ヴォルデモートにはまったくないものなのじゃ。その力が、今夜きみを、シリウス救出に向かわせた。その力が、ヴォルデモートが取り憑くことからきみ自身を護った。なぜなら、あやつが嫌っておる力が満ちている体には、あやつはとでも留まることができぬからじゃ。結局、きみが心を閉じることができなかったのは、問題ではなかった。きみを救ったのは、きみの心だったのじゃから」

(第37章「失われた予言」松岡佑子訳)

学生たちに翻訳してもらった部分には mind と heart が含まれ、それをどう訳し分けるかがこのポイントだった。mind も heart も「心」と憶えた私たち日本人にはこの差がよくわかっていないからだ。mind は理性が宿る「頭」であり、heart と同意語ではない。第3巻の映画『アズカバンの囚人』で、占い学のトレローニー教授が ‘But at first, you must broaden your minds’ (字幕は「さあ心を広げて見ましょう」) と生徒たちに言いながら、ある生徒の頭をつかんでいるのが私たちにはとても教育的だった。

KA：「心を閉じることを、頭で考えても、できなかったのは当然。それ

は問題じゃない。だって結局あなたを救ったのは、ありのままの心そのものなのだから。」

MK：「君の頭に浮かぶ思い出を閉ざすことは問題ではなかったんだ。君を救ったのは、実際に君が持っている愛情だよ。」（思い出じゃなくて、現実）

KK：「心を閉じる閉じないの問題ではなかったんだよ。お前を救ってくれたのは、ヴォルデモートではなく、お前が持っているものじゃよ。」

SK：「最終的に、君の心をヴォルデモートに閉じることは問題ではなく、君を救ったのは、君の今までの過去の人生だ。」

YS：「最終的に、君が自分の理性を保つことができなかったことが問題ではなかったのだ。君の中にある愛情が君を救ったのだ。」

YT：「最後は、君が君の精神を閉じることが出来なかったことが問題ではない。君を救ったのは、君の感情だ。」

RT：「結局、ハリーの心を閉じられなかったのは問題ではない。ハリーが救われたのは感情があったからだ。」

YH：「最終的には頭で考えようとしても、ハリーを救ったのは心の奥底にある魂だよ。」

「頭」と「心」、「(過去の) 思い出」と「(今持っている) 愛情」、「心」と「今までの人生」、「理性」と「愛情」、「精神」と「感情」、「頭」と「魂」など、それぞれに工夫した対比が提案された。「心」と「ヴォルデモートにはないがハリーは持っているもの」という観念的なものまであった。内容が抽象的なので、訳しづらくて意識が多いが、それでも mind も heart も同じ「心」で訳して意味が通じなくなってしまう松岡訳よりは誠実な態度ではないかと思う。松岡訳では、「心を閉じなかったからこそ、その心がハリーを救った」と同一のものを指しているように読め

てしまう。ついでながら言うと、松岡訳の「大量に所持」も麻薬でもあるまいし、やめて欲しい。

この場面は、各巻の結末部分でダンブルドアがハリーに重大な情報を与えるという典型的な場面でもあり、第2巻の翻訳で取り上げた場面に雰囲気は似ているが、mind と heart の訳し分けにトライし、その違いを今後は意識して欲しいという想いもあって選んだ。

《MOVIE》

第5巻の映画の最後の場面だ。台詞と字幕を並べてみると、字幕の情報量がいかに少ないかを実感するような箇所でもある。ホグワーツでの第5学年目が終り、夏休みで帰省するハリー、ロン、ハーマイオニーの三人がヴォルデモートとのこれからの闘いに思いを馳せる。

HARRY	I've been thinking about something Dumbledore said to me.
HERMIONE	What's that?
HARRY	That even though we've got a fight ahead of us, we've got one thing that Voldemort doesn't have.
RON	Yeah?
HARRY	<u>Something worth fighting for.</u>
ハリー	校長と話して考えた
ハーマイオニー	何を？
ハリー	僕たちはヴォルデモートにないものを持っている <u>“守るべきもの”だ</u> (字幕：岸田恵子)

「ダンブルドア校長が言ったことをずっと考えていた」という台詞を

「校長と話して考えた」という短い字幕にしなければならないのだから、字幕翻訳は大変だ。これは短いとはいえ訳されただけまして、‘That even though we’ve got a fight ahead of us’ 「闘いが僕たちを待ち受けてはいるけれど」という部分もロンの相づちも訳されてさえない。ここで学生たちに課せられたのは‘Something worth fighting for.’ という台詞だ。「そのためには闘ってもいいと思えるような何か」をどう訳すか。

KA： 戦って守っていく価値のある仲間だ

MK： 戦う価値のある大切なものだ

KK： “何のために戦うか” だよ

SK： 何のために戦うか

YS： 戦うほどの価値があるものだ

YT： 誰のためにたたかうという心だ

RT： 戦う価値のあるものだ

YH： 守るべき仲間だ

「守るべき対象の仲間、誰か」という具体的イメージがあると同時に、「何のために闘うか、闘う価値のある何か」という抽象的な訳もあった。something を守るべき「人」ととるか「大儀名分」ととるか感じ方が違ったようだ。何人かは岸田訳と同様に「もの」になっているが、ひらがなの「もの」はもしかすると人も事柄も包括できる便利な表記なのかもしれない。そして同様のことが「何のため」の「何」にも言えそうだ。someone が「人」、something が「物」という杓子定規な考え方に囚われるのではなくて、例えば物が「愛」だとすればそこには相手が存在するはずで、「もの」は something の向こうに「人」が透かして見えてくる訳にもなりうる。

第1巻から第4巻まで字幕が戸田奈津子、吹替え翻訳が岸田恵子だった

たが、第5巻からは字幕も岸田恵子が担当するようになった。『ロード・オブ・ザ・リング』でも批判が後を絶たなかった戸田奈津子の字幕から、『ハリー・ポッター』もついに解放されたわけだ。

6. 『ハリー・ポッターと謎のプリンス』

Harry Potter and the Half-Blood Prince (2005)

《BOOK》

第4巻後半から、登場人物たちがしだいに恋愛を意識する様子が描かれてきていたが、好きなのにいつも反発し合ってしまうロンとハーマイオニーの関係は、ロンとラベンダーが公認の仲になってから一層こじれていく。クイディッチという魔法界のスポーツの試合に勝った後、寮の祝賀会で抱き合っている二人を避け、ハーマイオニーが寂しく教室にいるところをハリーが見つつけ慰める。そこにロンとラベンダーが入ってきてしまうのが次の場面だ。

The door behind them burst open. To Harry's horror, Ron came in, laughing, pulling Lavender by the hand.

'Oh,' he said, drawing up short at the sight of Harry and Hermione.

'Oops!' said Lavender, and she backed out of the room, giggling. The door swung shut behind her.

There was a horrible swelling, billowing silence. Hermione was staring at Ron, who refused to look at her, but said with an odd mixture of bravado and awkwardness, 'Hi, Harry! Wondered where you'd got to!' (Chap. 14 'Felix Felicis')

背後のドアが突然開いた。ハリーは凍りつく思いがした。ロンがラベンダーの手を引いて、笑いながら入ってきたのだ。

「あっ」ハリーとハーマイオニーに気づいて、ロンがギクリと急停止した。

「あらっ！」ラベンダーはクスクス笑いながら後退りして部屋から出ていった。その後でドアが閉まった。

恐ろしい沈黙が膨れ上がり、うねった。ハーマイオニーはロンをじっと見たが、ロンはハーマイオニーを見ようとせず、空威張りと照れくささが奇妙に交じり合った態度でハリーに声をかけた。

「よう、ハリー！ どこに行ったのかと思ったよ」

(第14章「フェリックス・フェリシス」松岡佑子訳)

ここでのポイントはオキシモロン oxymoron 表現をどう翻訳するかだった。「常識で考えると両立しないような言葉を組み合わせることで、より印象的な表現にすること」という辞書的な解説をし、「deafening silence 耳をつんざくほどの静寂」、「cruel kindness 残酷な優しさ」などの例もあげる。この場面では、無風状態のはずの silence という名詞に、嵐の海を思わせるような swelling や billowing といった修飾語がつき、さらにその光景の恐ろしさを horrible が強調する。沈黙するハーマイオニーの激しく動揺し怒り渦巻く心情を描いた迫力ある文だ。

KA：そこには、ふくれあがるような、大波がうねるような恐ろしい沈黙があった。

MK：そこには恐ろしくふくれあがり、大波のようにうねる静けさがあった。

KK：恐ろしく膨らみ、波がうねるような沈黙があった。

SK：そこにはおそろしいほどふくれ上がる静けさがうずまいていた。

YS：そこには、おそろしいほどの静けさが広がった。

YT：そこには恐ろしさのふくらみ、静けさのうずまきがあった。

RT： 恐ろしいものがふくらみ、静かにうねっていた。

YH： そこには鳥肌が立つような沈黙があった。

silence を名詞のまま捉えた訳もあれば、修飾語と名詞の関係を逆転させて「静かにうねる」とした訳もある。billowing という修飾語を「うずまいていた」と動詞表現に置き換えた訳もある。全体を嵐のイメージからもっと内的な「鳥肌が立つような」と変容させた超意訳もある。松岡訳でも品詞のシフトがあり、2つの修飾語を動詞として機能させている。最初の二人の学生の訳が文法的に一番ストレートな訳し方であり、3番目の学生の訳には、形容詞が3つ続く場合には、その1つを副詞的に訳すことで日本語としてのぎこちなさを軽減するという工夫も見られる。文章が観念的であればあるほど、翻訳の可能性にも幅が出てくるようだ。それにしても松岡訳の「急停止した」は人間に使う表現だろうかかと疑問に思う。

時には詩的な文章も訳させてみたいと思い選んだのが、ダンブルドアが亡くなって、彼のペットであった不死鳥フォークスが哀悼を歌う場面だ。ちょうど terrible beauty 「恐ろしいまでに美しい」という表現もありオキシモロンの復習にもなる。その歌が、外側ではなく自分の内側で歌われているようにハリーは感じている。

... Somewhere out in the darkness, a phoenix was singing in a way Harry had never heard before: a stricken lament of terrible beauty. And Harry felt, as he had felt about phoenix song before, that the music was inside him, not without: it was his own grief turned magically to song that echoed across the grounds and through the castle windows.

.....

...As he lay there, he became aware suddenly that the grounds were silent. Fawkes had stopped singing.

And he knew, without knowing how he knew it, that the phoenix had gone, had left Hogwarts for good, just as Dumbledore had left the school, had left the world... had left Harry.

(Chap. 29 'The Phoenix Lament')

暗闇のどこかで、不死鳥が鳴いていた。ハリーが初めて聞く、恐ろしいまでに美しい、打ちひしがれた嘆きの歌だった。そしてハリーは、以前に不死鳥の歌を聞いて感じたと同じように、その調べを自分の外にはなく、内側に感じた。ハリー自身の嘆きが不思議にも歌になり、校庭を横切り、城の窓を貫いて響き渡っていた。

..... (中略)

・・・横たわっていると、突然、校庭が静かなのに気がついた。フォークスが歌うのをやめていた。

なぜそう思ったのかはわからなかったが、ハリーは不死鳥が去ってしまったことを悟った。永久にホグワーツから去ってしまったのだ。ダンブルドアが学校を去り、この世を去ったのと同じように……ハリーから去ってしまったのと同じように。

(第 29 章「不死鳥の嘆き」松岡佑子訳)

不死鳥の歌が自分の内側で歌われているという前述の描写が、では具体的にどういうことなのかという部分を学生たちに翻訳してもらった。ハリーの悲しみは魔法をかけられたかのように歌となり、その歌がホグワーツの敷地内を抜け、城（ホグワーツ校舎）の窓を通して響いている。ハリーの視点で始まり、不死鳥の視点からホグワーツ全体を見下ろすような後半部分で終わる、視点に動きのある文だ。

- KA：彼自身の深い悲しみが、城の窓を通して、敷地に響き渡る歌に魔法で変わったようなものだった。
- MK：彼自身の深い悲しみが敷地を越え、城の窓を通して響き渡り、魔法の力で歌に変わった。
- KK：彼の悲しさは魔法の力で歌に変わった。その地に、そして城の一つ一つの窓に響いていった。
- SK：魔法の力でかなしみが歌に変わり、城の窓と敷地に響きわたった。
- YS：彼の悲しみは魔法をかけられたかのように歌に変わり、それは窓を通してhogwartsの城の中にも響き渡った。
- YT：それは彼自身の深い悲しみが魔法によって歌にかわったようなものだった。学校の敷地や、そして城の窓をさえも通す、ひびきわたるような歌だった。
- RT：彼自身の悲しみは魔法で歌に変わり、敷地と城の窓を通して響き渡った。
- YH：彼の深い悲しみは魔法によって歌となった。それはhogwartsの中にひびきわたり、窓を通して聞こえてきた。

「悲しみが歌に変わる。それが敷地や城の窓に広がる」という比較的英語の語順に従った訳と、「悲しみが、敷地や城の窓に広がる歌に変わる」と広がる場所を歌にかかる修飾語句とした訳がある。that が関係代名詞なので、それに文法的に忠実であろうとしたのが後者だろう。ただ言語は聞こえてくる順番、読んでいく順番に理解するのが自然だといつも教えているので、前者のように訳す学生が多いのも不思議ではない。松岡訳でも関係代名詞というよりは並列の関係で2つの節を繋げている。

松岡訳では magically が「不思議にも」となっているが、学生たちは全員、ここはhogwartsなのだし、magic は「魔法」の意味で訳したかったようだ。一つ一つの単語の持つ意味もできるだけ生かすという方針も

学生たちに浸透してきたらしい。

《MOVIE》

映画の最後でハリー、ロン、ハーマイオニーの三人が城の一番高い塔に立ち、ダンブルドア亡き後の使命について話している場面だ。ハリーは最終7学年目をホグワーツで過ごさず、使命を果たすため旅に出るつもりだ。

HARRY	I'm not coming back, Hermione. I've got to finish whatever Dumbledore started. And I don't know where that'll lead me, but I'll let you and Ron know where I am when I can.
HERMIONE	I've always admired your courage, Harry, but sometimes, you can be really thick. You don't really think you're going to be able to find all those Horcruxes by yourself, do you? <u>You need us, Harry.</u>
ハリー	学校には戻らない ダンブルドアの遺志を引き継ぐ 先は見えないけど―― 君とロンには 居場所を知らせるよ
ハーマイオニー	あなたは勇敢だけど―― 時々ニブいんだから 1人で分霊箱を全部 探せると思う？ <u>私たちも行くわ</u> (字幕：岸田恵子)

ダンブルドアが始めたこととは、闇の魔法使いヴォルデモートを倒す

ために、彼の魂が7つに分割され守られている分霊箱（この松岡訳もどうかとは思いますが）を探し出し破壊することだ。これまでに日記と指輪は破壊されている。ダンプルドアが命がけで手に入れたロケットが実は偽物だとわかった。ハリーは一人で残りの分霊箱を探す旅に出るつもりだが、ハーマイオニーはそれを許さない。‘You need us, Harry.’はプロの字幕では「私たちも行くわ」と訳されている。「あなたには私たちが必要」という英語の台詞を理由の部分と考え、日本語では「(だから) 私たちも行く」という、架空の結論部が字幕になっている。字幕翻訳とは思考のジャンプも必要なのかもしれない。

KA： 私たちならきっとあなたを助けられるわ

MK： ハリーは私たちの力も必要はず

KK： 私たちのこと忘れないで

SK： 私たちが力になるわ、ハリー

YS： 私たちが必要になるわ、ハリー

YT： お互いが必要よ

RT： ハリー、私たちも手伝うよ

YH： あなたの力になれると思うわ

英語に忠実に You を主語にした訳が多いのは、英語の台詞と日本語の字幕の方向の違いを説明した後だったからだろう。need の訳は「必要とする」だけでなく、「忘れないで」や「手伝う」「力になる」などにも解釈が広がった。you と us を分けずに「お互いが必要」とした訳もある。英語は単純な現在形の文だが、何人かは「必要はず」や「必要になるわ」という未来を含んだ言い回しになっているのも面白い。これほど単純な台詞でさえこれだけのバリエーションが出る。一人のプロが作った字幕に頼って観ている映画には、どれだけその字幕翻訳家の色がついて

いるのかと実感するような演習だった。

呼びかけの「ハリー」を入れたのは三人に留まった。やはり日本語の文脈ではあまり名前を呼ばないのかもしれない。一人は「ハリー」を主語として使っている。人称代名詞よりも人名を好む日本語の特徴がこんなところにも出た。

7. 『ハリー・ポッターと死の秘宝』

Harry Potter and the Deathly Hallows (2007)

《BOOK》

分霊箱を探す旅の途中で、ハリーとロンの仲に亀裂が入り、ロンが出て行ってしまふ。ハーマイオニーと二人だけの旅を続けるハリーがある夜、森の中を牝鹿のパトローナス（動物の形をとる守護霊）に導かれ、凍った池にグリフィンドールの剣が沈んでいるのを見つける。呪いのかかった分霊箱のロケットを首に掛けたまま池に潜り、ハリーはロケットに首を絞められ溺れるところだったが、そこに戻って来たロンが現れ、ハリーは救われる。その再会の場面だ。

Simultaneously they walked towards and hugged, Harry gripping the still sopping back of Ron's jacket.

'And now,' said Harry, as they broke apart, 'all we've got to do is find the tent again.'

But it was not difficult. Though the walk through the dark forest with the doe had seemed lengthy, with Ron by his side the journey back seemed to take a surprisingly short time.

(Chap. 19 'The Silver Doe')

二人は、同時に歩み寄って抱き合った。ハリーは、まだぐしょぐしょのロンの上着の背を、しっかり抱きしめた。

「さあ、それじゃ——」

互いに相手を離しながら、ハリーが言った。

「あとはテントを再発見するだけだな」

難しいことではなかった。牝鹿と暗い森を歩いたときは遠いように思ったが、ロンがそばにいますと、帰り道は驚くほど近く感じられた。(第19章「銀色の牝鹿」松岡佑子訳)

牝鹿のパトローナスを追って一人で真っ暗な森を歩いた時とは違い、ハーマイオニーが待つテントへの帰り道は、戻って来てくれたロンと歩くのだから、ハリーには距離がとても短く感じられる。with Ron by his side という句を学生たちはどう処理するのだろうか。

KA： 牝鹿との暗い森での道のりは長く感じたけれど、ロンとの帰りの道のりは、驚くほど短く感じた。

MK： 牝鹿と一緒に暗い森の中を通り抜けて歩いたときは、時間がとても長く感じたけれども、ロンと一緒に帰る帰り道はありえないくらい短い時間のように思えた。

KK： 牝鹿と一緒に行く暗い森への道のりは長いように感じたけれど、横にロンがいたので、帰り道は驚くほど短い時間だった。

SK： 牝鹿と自分で暗い森を歩くのは長く感じたが、ロンが迎えに来た帰り道は短く感じた。

YS： 不気味な森を牝鹿と歩いた道はとても長かったが、ロンが隣にいたその道程は不思議なことに短く感じた。

YT： 牝鹿と一緒に暗い森を歩いたのは長く思われたが、ロンがそばにいて戻った道はおどろくほど短い時間だった。

RT： 牝鹿と一緒に暗い森の中を歩いたのは長く感じたけれど、ロンが隣にいた帰り道は驚くほど短く感じた。

YH：牝鹿と一緒に暗やみの森を歩きすすむのはとても長く感じられたが、ロンと一緒に来た道に戻るのは驚くほど、あっという間だった。

八人中七人が「ロンと一緒に歩いた帰り道」というように with Ron by his side the journey back を一つのチャンクで考えている。なるほど、このように主部に組み入れてしまう方法もあるのかと感心した。もちろん文法的にはこれは「間違った」解釈だろうけれど、翻訳では品詞や機能は原文と同じでなくても構わない。学生たちの柔軟な心には驚く。with を理由の接続詞のように考える「横にロンがいたので」という正統派の訳をしたのは一人だけだったのにも驚いた。プロも理由を表す句として訳している。また「帰り道が短い時間」という距離と時間をごっちゃにしたようなねじれた訳をした学生が圧倒的に多いのは、やはり「何かをするのにこれだけの時間がかかる」の take という動詞の概念が日本人に定着しづらいことの証しのようにも思えた。

松岡訳には時々場違いな表現が見受けられるが、「再発見するだけ」というハリーの台詞もどうもおかしい。again を生かしたかったからかもしれないが、科学調査隊ではないのだから、again を無視したとしても「見つけるだけ」の方が文脈には合っていると思う。言い出せば切りがないが、「互いに相手を離しながら」も日本語としては不自然な表現だろう。

《MOVIE》

第7巻の映画は『Part I』と『Part II』に分かれている。ここでは『Part I』から2つの場面を取り上げる。(A)はヴォルデモート側からの攻撃をかわして無事に戻ったロンを褒めるトンクスの言葉を聞いて、ハーマイオニーが驚き、それにロンが反応している場面。(B)は結婚式の会場から突然逃げなければならなかったにもかかわらず、用意周到なハーマイオ

ニーが着替えの普段着まで持ってきたことにロンが驚き、それにハーマイオニーが反応している場面。

(A) *In front of the Burrow. Hermione hugs Ron.*

RON Thanks.

TONKS Deserves that. Brilliant, he was.
I wouldn't be standing here without him.

HERMIONE Really?

RON Always the tone of surprise.

ロン ありがとう

トンクス ロンは大活躍したの
お陰で命拾いよ

ハーマイオニー 本当？

ロン 意外で悪かったね

(B) *At a back street off Shaftesbury Avenue*

HERMIONE We need to change.

RON How the ruddy...?

HERMIONE Undetectable Extension Charm.

RON You're amazing, you are.

HERMIONE Always the tone of surprise.

ハーマイオニー 着替えなきゃ

ロン どうやった？

ハーマイオニー “検知不可能 拡大呪文”

ロン 君 すごいよ

ハーマイオニー 意外で悪かったわね (字幕：岸田恵子)

相手の驚きに対して皮肉を言うミラーイメージになっている場面で、ロンとハーマイオニーが全く同じ台詞を言っている。‘Always the tone of surprise.’「いつも驚きの口調」を、男女で台詞を変化させる日本語にどのように翻訳するか、関心があった。

- KA： **ロン&ハーマイオニー** いつも驚いたような反応をするね
MK： **ロン** いつもと何かちがう？（皮肉っぽく）
ハーマイオニー いつもと何かちがうかしら？
KK： **ロン&ハーマイオニー** いつも通りだよ
SK： **ロン** いつものことだろう？
ハーマイオニー いつものことだけど？
YS： **ロン&ハーマイオニー** そんなに驚くこと？
YT： **ロン** 驚く口調はいつもだね
ハーマイオニー 驚く口調はいつもね
RT： **ロン&ハーマイオニー** いつも驚いているね
YH： **ロン** いつも通りだろう？
ハーマイオニー いつも通りよ（自信ありげに）

ロンとハーマイオニーの台詞を同じニュートラルな訳にした学生が半数、あとの半数が男女差をつけて訳した。岸田訳では語尾を変えて男女差を出している。私も訳すとしたら男女差をつけると思う。日本語では主語が男性なのか女性なのかで台詞の語尾が変わると当然のごとく思っていたが、若い世代の学生たちはそんな男女差をあまり感じなくなってきているのかもしれない。大学院時代に男女の会話が延々と続くトマス・ハーディの詩を読んだが、発話者がどちらなのかちよっと迷う台詞もあった。あの詩をこの学生たちに訳させてみたいと思った。

この場面では、指示したわけでもないのになぜか台詞だけではなくト

書きまでつける学生がいたのが不思議だった。岸田訳の「意外で悪かったね／悪かったわね」には、驚く理由が意外なことをしたからという、前節でも見た思考のジャンプが見られる。

《BOOK》

最強の魔法の杖を完全に支配したいヴォルデモートによってスネイプが殺される。その死に際に、「自分を見てくれ」とスネイプはハリーに頼む。スネイプはハリーの母リリーを子どもの頃から変わることなく愛し続けていた。外見が父親そっくりのハリーは、緑の目だけは母から受け継いでいた。その緑の目に見つめられることを、スネイプが最後に求める場面だ。

'Look ... at ... me ...' he whispered.

The green eyes found the black, but after a second something in the depths of the dark pair seemed to vanish, leaving them fixed, blank and empty. The hand holding Harry thudded to the floor, and Snape moved no more.

(Chap. 32 'The Elder Wand')

「僕を……見て……くれ」スネイプが囁いた。

緑の目が黒い目をとらえた。しかし、一瞬の後、黒い両眼の奥底に、何かが消え、無表情な目が、一点を見つめたまま虚ろになった。ハリーをつかんでいた手がドサリと床に落ち、スネイプはそれきり動かなくなった。(第32章「ニワトコの杖」松岡佑子訳)

第1巻からずっと、ハリーは亡き母を知る人々から「緑の目だけはリリーの目だ」と言われ続けてきた。それを憶えていれば、ここでスネイプがハリーに見て欲しいと思う気持も理解できよう。'Look ... at ...

me...? という台詞と、The green eyes found the black という英語らしい文を翻訳してもらった。

KA：「私を……見てくれ……」と彼はささやいた。

ハリーの中のリリーの緑色の目はやっとスネイプの黒い目を見ることとなった。

MK：「私の目を……見てくれ……」とスネイプはささやいた。

リリーと同じ緑色の目が黒い色をしたスネイプの目を見つけた。

KK：「私を……見て……くれ」とささやいた。

ハリーの緑色の目が黒い目を見つめた。

SK：「私を……見て……くれ」彼はささやいた。

リリーの目はスネイプの目を見た。

YS：「私を……見てくれ……」と彼はささやいた。

ハリーの緑色の目が、スネイプの黒い目をとらえた。

YT：「私を……見て……くれ」とささやいた。

ハリーの緑の目は、暗い目と目が合った。

RT：「私を……見て……」とスネイプはささやいた。

ハリーの緑色の目はスネイプの黒い目を見つめた。

YH：「私を……見て……おくれ」とスネイプはささやいた。

その緑色の目はスネイプの黒い目をじっと見つめた。

スネイプの心理を考えた後だったので、緑の目と黒い目にはほとんどの訳で原文にはないハリーとスネイプの名前が挿入されている。拡大解釈をして「リリーの目」になっている訳さえある。「ハリーの中のリリーの目」「リリーと同じ緑色の目」になると、もう翻訳というよりも解説である。松岡訳はこの場面の感動を読者の記憶力と読解力に委ねている。原作に忠実だ。found は「見つけた」の他に「見つめた」「とらえた」「目

が合った」がある。「やっと……見ることとなった」はかなり感情移入がある翻訳だ。

ここで特筆したいのは、スネイプの一人称を「我輩」と「私」で通して来た松岡が、ここで「僕」と訳している点だ。これは生徒や同僚に対しては「我輩」、ヴォルデモートに対しては「私」だったスネイプが、この場面でハリーにというよりも、リリーに対して話し掛けていると松岡が解釈したからだろう。緑の目と黒い目には所有者の名前を付さなかった松岡だが、それに先立つ台詞の中にその思いを込めたのかもしれない。日本語の一人称は発話者の性別、年齢、社会的地位だけではなく、話す相手によってこれだけ変化自在なのかと驚く。

《MOVIE》

映画からも同じ場面を選んだのは、小説の叙述文が映画の中ではどう処理されているかを知るためだった。映画ではナレーターでもない限り、The green eyes found the black. という叙述文は台詞をつけ加えて同じ情報を与えるしかない。

SNAPPE	Look ... at ... me. You have your mother's eyes.
スネイプ	私を見てくれ リリーと同じ目だ (字幕：岸田恵子)

‘Look ... at ... me.’ というスネイプの台詞は同じだが、そこに ‘You have your mother's eyes.’ という台詞が追加されている。本では「緑の目が黒い目を見た」という表現があるのでわかる読者にはわかるが、映画で「私を見てくれ」だけだったらスネイプの心理は伝わらないだろう。

- KA：私を……見てくれ……
リリーから見つめられているように感じるから
- MK：私の目を……見てくれ……
君はお母さんと同じ目をしているよ
- KK：私を……見て……くれ
母親の目とそっくりだ
- SK：私を……見て……くれ
君とリリーの目はそっくりだ
- YS：私を……見てくれ……
君の目は、リリーにそっくりだ
- YT：私を……見て……くれ
リリーそっくりの瞳だ
- RT：私を……見て……
君のお母さんと同じ目をしている
- YH：私を……見て……おくれ
君はお母さんと同じ目をしている

字幕が「リリーと同じ目だ」になっているからか、半数が「お母さん」ではなく「リリー」と言い換えている。mother だけでも「お母さん」と「母親」という訳の違いが生まれる。You have your mother's eyes. も簡単なようで実は日本語にするのが厄介な表現だろう。「同じ目をしている」と「そっくりだ」に訳は分かれた。「見つめられているように感じる」は翻訳ではなく、スネイプが自分を見てほしい理由だ。思考のジャンプは字幕翻訳家なみだ。

この場面では、小説ではできる心理叙述が映画ではできないということもあらためて意識させた。映画では台詞にするか、表情やしぐさなどの演技で表現するかだ。小説と映画あるいは演劇との決定的な違いだ。

《BOOK》

ヴォルデモートを倒すためには、凶らずも分霊箱の一つになってしまっていた自分も死ななければならないとハリーは悟る。ヴォルデモートと一人で対決するために森に向かうハリーの心臓の鼓動は激しくなる。死を目前にして、心臓がハリーを生かそう生かそうとしているかのようにハリーが感じている場面だ。

He felt his heart pounding fiercely in his chest. How strange that in his dread of death, it pumped all the harder, valiantly keeping him alive. But it would have to stop, and soon. Its beats were numbered. How many would there be time for, as he rose and walked through the castle for the last time, out into the grounds and into the Forest?

(Chap. 34 ‘The Forest Again’)

ハリーは、心臓が激しく胸板に打ちつけるのを感じた。死を恐れるハリーの胸の中で、むしろハリーを生かしておくために、より強く、雄々しく脈打っているのは、何と不思議なことか。しかしその心臓は、止まらなければならない。しかも間もなく。鼓動はあと何回かで終わる。立ち上がって、最後にもう一度だけ城の中を歩き、校庭から「禁じられた森」へ入っていくまでに、あと何回鼓動する時間があるのだろうか？（第34章「再び森へ」松岡佑子訳）

迫り来る死への恐怖と心臓が象徴する生への執着をハリーが同時に経験している。in his dread of deathと keeping him alive の死と生の対比を学生たちがどのように扱うのかがこの文のポイントだ。How strange から始まるこの文は、登場人物の心理を「～と誰々は思った」などの説明なしに地の文として叙述する自由間接話法であり、その効果も

何度か学生たちは学んでいた。

KA： 死の恐怖に侵されているハリーの体内で、心臓が勇敢にもハリーを生かそうとして、より一層激しく血を送っていたのは、とても奇妙だった。

MK： 彼の中で死への恐怖と、それとは反対に勇敢にも彼自身を生き延びさせようとしながら彼の心臓がよりいっそう激しく血を送り出そうとしている動きが共存しているのは、なんて不思議なことなんでしょう。

KK： なんて奇妙なことなのか。死への恐怖でハリーの心臓が今までにないくらい懸命に血をめぐらせていた。勇敢にもハリーを生き延びさせるためだった。

SK： 奇妙なくらい、死を目の前に恐怖で心臓がドキドキしている。ヴォルデモートの意志とは裏腹に、ハリーをずっと生かそうとしているように。

YS： 死の恐怖の中で、彼の心臓が勇敢にも生き延びようと強く激しく脈打つのは、なんて奇妙なことだろう。

YT： 死という恐怖により、心臓はより一層激しく鼓動した。勇敢にもその心臓は彼を生かしつづけた。それは何て不気味なんだろう。

RT： ハリーの死の恐怖で心臓により激しく血が送られ、勇敢にも彼を生かそうとしているのは、なんて奇妙に感じるのだろう。

YH： 死を目の前にした彼の恐怖とは反対に、ハリーの心臓が勇敢にも生き続けようと必死に動いているのは、とてつもなく不思議だった。

この文の主語 *it* は直前の文の *his heart* を指すが、それは暗黙の了解とすることなのか、松岡訳ではこの文に主語を置いていない。だからそ

の文だけを取り出して読むと、どうもおさまりが悪い。この文だけを訳した学生たちはみな主語を「心臓」と訳出している。文の構造も複雑だし、観念的な文なのでやはり翻訳するのは難しかったようだ。How strange を英語の語順に従って先に訳出した学生は「なんて奇妙なことなのか」とそこを独立させている。strange 自体も「奇妙な」と「不思議な」に分かれた。「不気味な」という訳もある。原文にはない要素も入ってきている。

文の中の役割としては今までにないほどばらついた in his dread of death だが、表現を拾ってみると「死の恐怖」「死への恐怖」「死を目の前にした恐怖」「死という恐怖」で落ち着いたようだ。keeping him alive は「生かそうとする」「生き延びさせる」「生かしつづける」というハリーを目的語とした表現と、「生き延びようと」「生き続けようと」のように心臓そのものが生きる意志を持っているような表現とがあった。文法にかなっている訳もあれば、意識したものもあるが、松岡訳も例えば valiantly keeping him alive の valiantly という副詞を英語に忠実に keep に掛けて訳しているのではなく、心臓が血を送り出す pump という動詞を修飾する語として訳している。プロでさえ苦勞の跡が見られる文だ。学生たちが苦戦するのも当然だ。

最後の週は、ハリーに対するロンとハーマイオニーの友情と、『ハリー・ポッター』に対する読者の想いを同じ表現で繋ぐ作業をした。ヴォルデモートを倒しはしたが、多くの大切な仲間も失ったハリーは、肉体的にも精神的にも疲れ果てている。しかしロンとハーマイオニーにはヴォルデモートとの対決で何が起きたのかを説明しなければならないと思う場面だ。

Happiness would come, Harry thought, but at the moment it

was muffled by exhaustion, and the pain of losing Fred and Lupin and Tonks pierced him like a physical wound every few steps. Most of all he felt the most stupendous relief, and a longing to sleep. But first he owed an explanation to Ron and Hermione, who had stuck with him for so long, and who deserved the truth.

(Chap. 36 ‘The Flaw in the Plan)

幸福感はそのうちやってくるだろう、とハリーは思った。しかしいまは、疲労感のほうが勝っていた。それに、フレッド、ルーピン、トンクスを失った痛みが、数歩歩くごとに肉体的な傷のようにキリキリと刺し込んできた。ハリーはいま、何よりもまず、大きな肩の荷が下りたことを感じ、とにかく眠りたかった。

しかし、その前に、ロンとハーマイオニーに説明しなければなら
ない。これだけ長い間、ハリーと行動をともにしてきた二人には、
真実を知る権利がある。 (第 36 章「誤算」松岡佑子訳)

この中で to Ron and Hermione, who had stuck with him for so long という箇所注目した。というのもここには、巻頭に置かれた読者に対する献呈の辞と同じ表現が使われているからだ。

《DEDICATION》

<i>The</i>	この
<i>dedication</i>	第七巻を
<i>of this book</i>	七つに
<i>is split</i>	分けて
<i>seven ways:</i>	捧げます。
<i>to Neil,</i>	ニールに
<i>to Jessica,</i>	ジェシカに
<i>to David,</i>	デイビッドに
<i>to Kenzie,</i>	ケンジーに
<i>to Di,</i>	ダイに
<i>to Anne,</i>	アンに
<i><u>and to you,</u></i>	<u>そしてあなたに、</u>
<i><u>if you have</u></i>	<u>もしあなたが</u>
<i><u>stuck</u></i>	<u>最後まで</u>
<i><u>with Harry</u></i>	<u>ハリーに</u>
<i><u>until the</u></i>	<u>ついてきて</u>
<i><u>very</u></i>	<u>くださったの</u>
<i><u>end.</u></i>	<u>ならば。</u> (松岡佑子訳)

この献呈の辞は、ハリーの額にある稲妻型の傷に似せて書かれている。何かを象った詩と言えば形而上詩人ジョージ・ハーバートの翼の詩が有名だが、形は『不思議の国のアリス』第3章のネズミの「長い尾話」に似ている⁹⁾。ヴォルデモートが自分の魂を7つの分霊箱に分けたように、作者は献呈の辞を7つに分け、その最後を読者に捧げている。その部分 *and to you, if you have stuck with Harry until the very end* で読者に対して使った表現が、ロンとハーマイオニーを説明した表現と同じなの

だ。松岡訳では本文は「ハリーと行動をともにしてきた」、献呈の辞は「ハリーについてきてくださったのならば」という違った表現になっている。

学生には、本文と献呈の辞で同じ表現を使った作者の意図を汲み、翻訳にも同じ表現を使うようにと条件を出した。文芸翻訳とはそのように細かいところにまで心を砕くべきものなのだ。

KA：（本文）しかし、まず最初に、彼にはロンとハーマイオニーに真実を説明する義務があった。なぜなら、二人は常にハリーと共に闘い、どんなことがあっても絆だけは壊れなかったし、真実を知るに値する仲間であったから。

（献辞）そしてあなたに、もしあなたが最後の最後までハリーと共に闘ってくれた勇者なら。

MK：（本文）だけどもまず一番に、真実を知ってもらわなくてはならなくて、本当に最後の最後までハリーの戦いを一緒に見守ってくれていたロンとハーマイオニーに説明しておかなきゃいけないことがあった。

（献辞）そして読者のみなさんへ、もしみなさんが最後の最後までハリーの戦いを一緒に見守ってくれたなら。

KK：（本文）まず最初にハリーはロンやハーマイオニーに説明しなければならなかった。だって二人は、どんな時も一緒に過ぎしてきた仲間、そして本当の事を知るに値する仲間だから。

（献辞）あなたへ、本当の最後までハリーと共にどんな時も一緒に過ぎしてきたならば。

SK：（本文）入学当初からハリーとずっと長い間一緒にいてくれたから、ロンとハーマイオニーには本当のことを説明しなければいけない。

（献辞）ハリー・ポッターを愛する人へ、ずっと一緒にいてくれた

ことをとても感謝しています。

YS：（本文）しかしハリーはまず、ハーマイオニーとロンに真実を話さなければならぬ。戦いの最後までハリーに寄り添っていた彼らは、真実を知る必要がある。

（献辞）そしてあなたも、物語の最後までハリーに寄り添ってくれたならば。

YT：（本文）だけど彼は最初に、とても長い間ハリーと共にいた真実を知るに値するロンとハーマイオニーに釈明をするべきだった。

（献辞）そして読者のあなたに、もしあなたが本当に最後までハリーと共にいたのであれば。

RT：（本文）しかし、ハリーは初めにロンとハーマイオニーに説明しなければならぬことがあった。二人は今まで長い間ハリーと一緒にいてくれたので、真実を知る必要があった。

（献辞）ハリー・ポッターの読者へ、本当の最後まであなたが一緒にいてくれたなら。

YH：（本文）しかし最初にハリーは、長い間共に人生を歩んできた、そして真実を知る価値のあるロンとハーマイオニーに説明する使命があった。

（献辞）そして今これを読んでいるあなたへ、もしあなたが本当のおわりまでハリーと共に人生を歩んでくれたのなら。

have stuck with の stuck は「ついて離れない」という意味の動詞だ。それをどう解釈するかに苦心した。二種類の全く違った人間関係を同じ表現で言い表さなければいけないのだから、学生たちも頭を抱えながら翻訳に取り組んでいた。「共に闘う」「共にいる」「共に人生を歩む」「一緒に見守る」「どんな時も一緒に過ごす」「一緒にいる」「寄り添う」。ハリー、ロン、ハーマイオニーの三人が、そしてハリーと読者が、この七

年間の物語をどう乗り越えてきたか。それに対して持つ学生たち一人一人のイメージは少しずつ違うということが、微妙にニュアンスの違う表現を使った翻訳に象徴されている。

おわりに

翻訳の限界と可能性を学生たちと一緒に体験した⁷⁾。前期に *English Through Literature*⁸⁾ というテキストで文学を読む素地を作り、後期15週のゼミではほんの一部ではあるが『ハリー・ポッター』全七作品の原文と映画の台詞に触れ、それを実際に翻訳してみたことは、学生たちにとってだけではなく私自身にとっても想像していた以上に得るものが大きかった。翻訳にはもちろん英語力が必要だが、日本語のセンスもまたいかに大切かを痛切に感じた。

私がパッセージの場面解説や登場人物の心情説明をし過ぎてしまい、その知識が先入観となって学生たちの訳に反映し、原文にはない要素が入り込んでしまうという失敗もあった。あるいは英語の文章が文法的に難しい時には、英語から日本語に移し替えるのではなく、場面設定から想像して創った意識になってしまうこともあった。しかし翻訳の作業を通して学生たちの柔軟な感性にはっと気づかされ教えられることも多かった。そしてなによりも、翻訳を通して言葉に対する感覚を磨き、精神的にも成長していく姿を目にしたこと、そして翻訳の作業が面白くなったという言葉聞くことは、とても喜ばしいことだった。

翻訳とは一人の翻訳家の頭や心というフィルターを通したものであり、そのフィルターが無色透明でいられることはまず不可能だ。多少の違いはあっても、翻訳には原作者の意図とは少しだけ違う色がついてしまう。それを知った上で翻訳を読み、興味を持ったら原文にあたってみる。また、映画の字幕を追っていて、疑問を感じたら英語の台詞を調べてみる。翻訳に関心を抱くことは、英語に対しても日本語に対しても感

覚を研ぎ澄ませておくことに繋がる。翻訳作業を通して得た言葉に対する興味を、学生たちが卒業後も持ち続けてくれれば、こんなに嬉しいことはない。

注

1) 参考にした文献と映画は以下の通り：

原典：

J. K. Rowling, *Harry Potter and the Philosopher's Stone* (London: Bloomsbury, 1997)/*Harry Potter and the Sorcerer's Stone* (New York: Scholastic, 1998)

—, *Harry Potter and the Chamber of Secrets* (London: Bloomsbury, 1998/New York: Scholastic, 1999)

—, *Harry Potter and the Prisoner of Azkaban* (London: Bloomsbury/New York: Scholastic, 1999)

—, *Harry Potter and the Goblet of Fire* (London: Bloomsbury/New York: Scholastic, 2000)

—, *Harry Potter and the Order of the Phoenix* (London: Bloomsbury/New York: Scholastic, 2003)

—, *Harry Potter and the Half-Blood Prince* (London: Bloomsbury/New York: Scholastic, 2005)

—, *Harry Potter and the Deathly Hallows* (London: Bloomsbury/New York: Scholastic, 2007)

日本語翻訳：

J・K・ローリング『ハリー・ポッターと賢者の石』松岡佑子訳（静山社、1999年／携帯版2003年／文庫版2巻2012年）

—『ハリー・ポッターと秘密の部屋』松岡佑子訳（静山社、2000年／携帯版2004年／文庫版2巻2012年）

—『ハリー・ポッターとアズカバンの囚人』松岡佑子訳（静山社、2001年／携帯版2004年／文庫版2巻2012年）

- 『ハリー・ポッターと炎のゴブレット』松岡佑子訳（静山社、上下巻 2002年／携帯版 2006年／文庫版 3巻 2012年）
- 『ハリー・ポッターと不死鳥の騎士団』松岡佑子訳（静山社、上下巻 2004年／携帯版上下巻 2008年／文庫版 4巻 2012年）
- 『ハリー・ポッターと謎のプリンス』松岡佑子訳（静山社、上下巻 2006年／携帯版上下巻 2010年／文庫版 3巻 2013年）
- 『ハリー・ポッターと死の秘宝』松岡佑子訳（静山社、上下巻 2008年／携帯版上下巻 2010年／文庫版 3巻 2013年）

映画：

- 『ハリー・ポッターと賢者の石』クリス・コロンバス監督（ワーナー・ブラザーズ、2001年）字幕翻訳：戸田奈津子、吹替翻訳：岸田恵子
 - 『ハリー・ポッターと秘密の部屋』クリス・コロンバス監督（ワーナー・ブラザーズ、2002年）字幕翻訳：戸田奈津子、吹替翻訳：岸田恵子
 - 『ハリー・ポッターとアズカバンの囚人』アルフォンソ・キュアロン監督（ワーナー・ブラザーズ、2004年）字幕翻訳：戸田奈津子、吹替翻訳：岸田恵子
 - 『ハリー・ポッターと炎のゴブレット』マイク・ニューウェル監督（ワーナー・ブラザーズ、2005年）字幕翻訳：戸田奈津子、吹替翻訳：岸田恵子
 - 『ハリー・ポッターと不死鳥の騎士団』デイビッド・イエーツ監督（ワーナー・ブラザーズ、2007年）字幕・吹替翻訳：岸田恵子
 - 『ハリー・ポッターと謎のプリンス』デイビッド・イエーツ監督（ワーナー・ブラザーズ、2009年）字幕・吹替翻訳：岸田恵子
 - 『ハリー・ポッターと死の秘宝 Part I』デイビッド・イエーツ監督（ワーナー・ブラザーズ、2010年）字幕・吹替翻訳：岸田恵子
 - 『ハリー・ポッターと死の秘宝 Part II』デイビッド・イエーツ監督（ワーナー・ブラザーズ、2011年）字幕・吹替翻訳：岸田恵子
- 2) もととのブルームズベリー社発行 UK 版は挿絵も全くない。スコラステック社発行 US 版も日本語訳も作者の意向で挿絵はないが、US 版にはメアリー・グランプレ（Mary GrandPré）の扉絵が、日本語版には

- ダン・シュレスインジャー (Dan Schlesinger) による扉絵が、各章についている。(日本語版では手紙に涙の跡をつけたり、胸につけるバッジやハリーの両親の墓石をイラストとして描いたりもしているが、そこに原文の一部を組み込んでるので、挿し絵と見なしていないのだろう。)
- 3) 翻訳の「賞味期限」については、村上春樹・柴田元幸『翻訳夜話』(文春新書、2000年)に詳しい。
 - 4) 本文中、イニシャルで記載されている2012~13年英文学科専門ゼミナール生たちは、阿部楓(あべ・かえで KA)、木谷美咲(きや・みさき MK)、国兼慶(くにかね・けい KK)、倉野聖子(くらの・せいこ SK)、清水優(しみず・ゆう YS)、田辺由加里(たなべ・ゆかり YT)、栃原理沙(とちはら・りさ RT)、本間祐美(ほんま・ゆうみ YH)の8人。注の中の氏名の記載は、紀要が冊子としてだけではなくインターネット上でもアクセス可能なことを説明の上、本人たちの了解をとった。
 - 5) 二つの固有名詞は音の面でも繋がりがあがる。ハリーにとっての大きな存在である Hogwarts、ハグリッド Hagrid、そして白フクロウのヘドウィッグ Hedwig はみな h と g を含む古い英語を思わせる力強い単語だ。
 - 6) George Herbert, 'Easter Wings,' *The Temple* (1633); Lewis Carroll, Chap. 3 'A Caucus-Race and a Long Tale,' *Alice's Adventures in Wonderland* (1865).
 - 7) 学生の訳も紹介した翻訳に関する本で面白かったものに、柴田元幸『翻訳教室』(新書館、2006年)や斎藤兆史『翻訳の作法』(東京大学出版会、2007年)などがある。
 - 8) 斎藤兆史・中村哲子編注『*English Through Literature* 文学で学ぶ英語リーディング』(研究社、2009年)。